

『祝福のグラス』における喜劇的戦略としての誤読する語り手 A Fallible Narrator as a Comic Strategy in *A Glass of Blessings*

近藤 真理子

KONDO Mariko

要旨

バーバラ・ピムはその人間観察の鋭さやウィットに富んだ語り口で、イギリスの偉大な小説家ジェーン・オースティンに喩えられることが多い。彼女がオースティン流のイギリス喜劇の伝統を受け継いでいることは明らかである。本稿では、『祝福のグラス』を取り上げ、語りの観点からその喜劇性について考察する。この作品は、ヒロイン、ウィルメット・フォーサイスが一人称で語る物語であるが、彼女は現実誤読を繰り返すあてにならない語り手である。彼女の語りを分析することによって、語り手の人物設定と彼女のナイーブな語りが生み出すドラマティック・アイロニーが浮き彫りとなる。この作品の喜劇としての成功は誤読する語り手ウィルメットを創造したことによると言ってもよいだろう。

Barbara Pym has been often compared to Jane Austen because of her acute sense of observation and witty descriptions. Evidently, she inherits the English tradition of comedy from Austen. In this paper, I would like to examine Pym's comic strategies in *A Glass of Blessings* in terms of narration. The story is narrated in the first person by the heroine Wilmet Forsyth, who turns out to be a fallible narrator at the beginning of the novel. The analyses of her narration will reveal dramatic ironies which derive from her naivety and self-centeredness. The success of *A Glass of Blessings* as a comedy depends to a large extent on the adoption of the fallible heroine as narrator.

キーワード：語り手 (A Narrator)、喜劇 (Comedy)、ロマンス (Romance)、ヒロイン (Heroine)
ドラマティック・アイロニー (Dramatic Irony)、「無用」 (Useless)、バーバラ・ピム (Barbara Pym)

I

バーバラ・ピム (Barbara Pym, 1913-1980) の作家としての経歴は、その生涯を通して見れば決して順風満帆とは言えない。現在でこそ、その人間観察の鋭さやウィットに富んだ描写により「20 世紀のジェーン・オースティン」と称され、作家としての地位が認知されているピムであるが、その評価のアップダウンは他に例を見ないほど激しいものであった。1950 年に『なついた羚羊』(*Some Tame Gazelle*, 1950) の第一作出版を皮切りに、続く 10 年間には 5 作の小説を順調に発表した。これらの作品により、彼女は作家としての評価を揺るぎないものにし、多くの読者を獲得するに至ったのである。

1961 年、ピムの作風に魅了された詩人のフィリップ・ラーキン (Philip Larkin, 1922-1985) は、彼女の小説について評論を書きたいと本人に手紙を書き送っている。ラーキンのこの申し出に対し、当時ピムは次回作『不相応な愛情』(*An Unsuitable Attachment*) を執筆中だったため、少し待ってくれるよう返事をした。ところが、その 2 年後、完成した新作をこれまでと同じ出版社ケース (Case) 社に送ったところ、拒絶されてしまう。突然の拒否に驚愕したピムは他の出版社にも送り続けるが、何度修正を加えてみても、ことごとく出版拒否されてしまう。ある時は「控え目すぎる」であったり、またある時は「大

衆が目を向ける類の小説ではない」というのがその理由であったが、結局 1965 年までに 20 社に出版を断られてしまった。

その後、長きに渡って、ピムは作家として不遇の時代に耐えることになる。しかしながら、果てしなく続くと思われる出版拒否の時期にあつて、彼女は決して小説の執筆を諦めなかった。1960 年代も作品を描き続け、病氣と闘いながら、1976 年『秋の四重奏』(*Quartet in Autumn*)を書き上げる。馴染みの出版社数社へ送るが、例の如く拒絶され、その時ばかりは酷く落ち込む結果となってしまう。

しかし、その数ヶ月後、ピムにとって奇跡ともいえることが起こる。1977 年 1 月 21 日の *Times Literary Supplement* の“Reputation Revisited”という記事の中で、デヴィッド・セシル(David Cecil, 1902-1986)とラーキンが、「この 75 年間で最も過小評価されている」(the most underrated author of the past seventy-five years)作家として彼女の名前を挙げたのだ。セシルは『すばらしい女たち』(*Excellent Women*, 1952)と『祝福のグラス』(*A Glass of Blessings*, 1958)を“the finest examples of high comedy to have appeared in England during the past seventy-five years”(Weld, 6)と称賛し、ピムの作品の喜劇性を高く評価した。同じ週のうちにその記事が *Sunday Times* で紹介され、またもや突然バーバラ・ピムの名前と作品が脚光を浴びることになった。これらの状況を受けて、彼女の作品を軽視し続けてきたケイス社は、急いでこれまでの冷遇を埋め合わせる契約を提示したが、既にピムはマクミランと契約を交わした後であった。マクミランより年内に出版された『秋の四重奏』は高評価を得て、その秋のブッカー賞候補となった。M.コッツェル(M. Cotsell)が“The critical reception of the work of Barbara Pym can be divided into two distinct phases: before 1977 and after 1977”(139)と述べるように、この年を境にピムの作家人生は一変する。16 年もの不遇時代の後、ピムは文壇に再発見されることになったのだ。この数奇な再発見により、彼女は更なる世間の注目を集め、数々のインタビューに登場し、新作も含め彼女の作品は各国語に翻訳されていった。彼女は 1980 年に亡くなったが、その不遇時代の端緒となった『不相応な愛情』は、ラーキンの序文つきで死の 2 年後に出版された。そして、『なつた羚羊』以前の作品や不遇時代の遺稿も次々と公刊され、今やピムは押しも押されぬ 20 世紀イギリスの小説家としてその地位を不動のものにしている。1980 年代からは、ピムの伝記や日記・書簡のみならず、研究書も数多く刊行され始め、バーバラ・ピム研究は高まりを見せ、現在に至っている。¹

本稿では、ピムが発表した 5 作目の作品『祝福のグラス』を取り上げ、冷遇時代以前に評価された彼女の作品の喜劇的手法について、ヒロインの一人称の語り手という観点から検討してみたい。

II

『祝福のグラス』はピムの執筆活動が波に乗り、10 年間で 6 作品をケイス社から次々と発表していた時代の 5 作目の作品である。2021 年、Virago 版の序文でクレア・チェインバース(Clare Chambers)は、この作品について次のように述べている。

Although contemporary reviews in the press were not especially warm, Oxford dons John Barley and David Cecil rated the novel her finest, and it is easy to see why. If Pym is often compared to Jane Austen for her wit, social comedy, miniature canvas and delight in human absurdity, then perhaps *A Glass of Blessings* may be compared to *Emma*. (vi)

ここで指摘されているように、この『祝福のグラス』のみならず、不遇の時代を迎えるまでのピムの作

品の大きな特徴は、ウィットに富んだ語り口と、人間観察によって描き出される喜劇性である。また、その喜劇的描写には、人間に対する暖かい眼差しが常に注がれている。それに対して、1977 年の『秋の四重奏』以降の作品では、前期の特徴の残滓は残しながらも、明るい楽天的なトーンは姿を顰め、孤独と老いへの不安が作品全体を覆うようになる。これは、16 年の間、時代にそぐわないという理由で作品を拒絶され続けたピムが、新たな社会の変化を取り入れようとした結果であり、また、ピム自身がさまざまな病に苦しみ、孤独と老いの問題を作家自身が身をもって感じていたからでもあろう。その意味では、前述のように 1977 年は、ピム作品にとって明確な分水嶺となっている。

『祝福のグラス』はヒロインのウィルメット・フォーサイス(Wilmet Forsyth)が自分自身や周囲の日常的な出来事について一人称で語る物語である。言うまでもなく、一人称の語りにはその語り手の主観が大きく反映される。読者の物語理解は語り手次第と言っても過言ではない。そこで、この章では、語り手ウィルメットがどのような女性として造型されているか、彼女自身の語りから読み解いてみたい。

物語はウィルメットの 33 歳の誕生日、イギリス国教会（ウィルメットはよりカトリックに近い高教会派にこだわっている）の礼拝中に教会の電話が鳴り響くところから始まる。いつものことながら、礼拝に集中できないウィルメットは、振り向きざまに親友ロウィーナ(Rowena)の兄ピアーズ(Piers Longridge)がいることに気づく。ロウィーナによると、彼は 35 歳にもなるのに、職を転々とし満足のいく人生を送っていないらしい。ウィルメットが彼を見てまず考えたのは、“I realized again how good-looking he was, with his aquiline features and fair hair, and I wondered if I should have a chance to speak to him after the service was over.”(2)という彼のハンサムな容貌だ。礼拝の後、彼女は望み通りピアーズと話をする機会に恵まれる。少し失礼な発言をした後、ピアーズは埋め合わせのため“You look particularly charming today, Wilmet.”と彼女を褒めるが、その時ウィルメットは彼の言葉を“in the provocative way I remembered”と述べている。そして、この直後に続くのは、以下のような彼女の言葉だ。

I was pleased at his compliment for I always take trouble with my clothes, and being tall and dark I usually manage to achieve some kind of distinction. Today I was in pale coffee brown with touches of black and coral jewellery. Rodney seldom commented on my appearance now and Piers had that engaging air of making me feel that he meant what he said. (5)

この最初の場面から見て取れるのは、彼女が異性を語るとき第一にコメントするのはその容貌であり、自身については服装やアクセサリーを含めた外見へのナルシシズムが自己肯定感と結びついていることだ。²

ウィルメットは官僚のロドニー(Rodney)と結婚し、不可知論者である義母のシビル(Sybil)とともに、シビルの家で暮らしている。ロドニーとは第二次大戦中、WRNS(Women's Royal Naval Service)の赴任先のイタリアで知り合い結婚したのだが、彼を好ましく思ったのは異国イタリアでホームシックにかかり、イギリス人気質を恋しく感じたせいだとウィルメットは分析している。ロドニーは毎年妻の誕生日の贈り物として、まとまった金額を妻の口座に振り込む現実的な人物だ。ウィルメットはそれについて次のように語っている。

...the transfer of a substantial sum of money to my account, nothing really spontaneous or romantic about it. Still, perhaps something good and solid like money was better than the

extravagant bottle of French scent that some husbands — my friend Rowena's, for example — might have given. (10)

ここからは、結婚生活に特に問題があるわけではないにしても、ウィルメットが夫との関係に必ずしも満足しているわけではないことがうかがわれる。

もう一点、ウィルメットには意識的にせよ、無意識的にせよ抱えている問題がある。それは自分が誰にとっても「無用」(“I'm useless”) (75)ということだ。

教会が主催する勉強会の話が出た時、そのような知的な活動(“intellectual occupations”)への参加をシビルから勧められると、ウィルメットはむきなって“You mean that I should have some work to do?”と問いかけ、自分の気持ちをこう吐露する。

...for I sometimes felt guilty about my long idle days. I did not really regret not having any children, but I sometimes envied the comfortable busyness of my friends who had. Nobody expected *them* to have any kind of occupation....

It was true that I had tried one or two part time jobs since my marriage, but Rodney had the old-fashioned idea that wives should not work unless it was financially necessary. Moreover, I was not trained for any career and hated to be tied down to a routine. (15)

ウィルメットのこの告白は、当時の中産階級の既婚女性の社会的立場を考える上で極めて重要だ。第一作の『なついた羚羊』以来、ピムは独身女性に焦点を当てて作品を描いてきた。その意味で、既婚女性の視点で語られるこの小説は注目に値する。1950年代、二度の大戦を経て、イギリス女性の生活はいわゆる19世紀に浸透した「家庭の天使」からは随分変化していたが、やはり暮らしむきがい中産階級の家庭では、まだ女性は良妻賢母がよしとされていた。WRNSの活動で知り合った大親友のロウィーナは、ウィルメットと同様、戦時中にイタリアで知り合ったハリーと結婚し、裕福な家庭の専業主婦としてロンドン郊外に居を構えている。環境も価値観もウィルメットと似通っているがゆえに、結婚後も二人の友情は続いている。ただ、ウィルメットと違うのは、ロウィーナが3人の子どもの子育てに奮闘中である点だ。世間は母親業に忙しいロウィーナを“useless”で“idle”だとは決して見做さない。そのような社会の風潮の中、子どもを持つ既婚女性はそれだけで自己の存在理由を示せると、子どもを持たないウィルメットが羨んだとしても無理はないだろう。

ただ、ウィルメットに関して言えば、もう一点家庭人として自らを「無用」と感じる理由がある。それは、ウィルメット夫妻が住んでいる立派な家が義母の持ち物であり、彼らはいわば居候に過ぎないということだ。当然、義母の家でウィルメットが主婦として家事一般を取り仕切ることではない。ウィルメットの家庭での役割として描かれているのは、上品に身なりを整えて客人の相手をする、玄関ホールに花を活ける手伝いをするくらいである。もちろん義母のシビルは、そのことで遊惰に暮らすウィルメットを非難するような女性ではない。彼女自身は69歳ながら社会奉仕に精を出し、考古学に熱を入れる好奇心旺盛で、極めて活動的な女性であるが、“Everybody should do as they like.”(15)という信条でウィルメットに自分の価値観を押しつけることはない。とはいえ、シビルがいい歳をした息子ロドニーをノディという少年時代のあだ名で呼んでいることは、この夫婦がまだ大人として独立していないことを暗示していると言えよう。

さらに上記のウィルメットの独白の後段に注目してみよう。ここでは、母親業ではなく、家庭外での

仕事について語っている。ウィルメットの告白は当時の既婚女性の労働環境を如実に反映していて興味深い。A.ローゼン(A.Rosen)は1951年の労働力に占める女性の割合がわずか31%だと指摘している。第二次大戦後のイギリス社会の変化はどの側面においても「良妻賢母」の神話を覆してもよいはずだったにもかかわらず、驚くべきことにこの数字は1931年の30%から20年間ほとんど変わっていないという。既婚女性について言えば、1931年には既婚女性は女性労働人口のわずか16%にすぎなかったが、1955年には48%に上昇した。ただ、こうした既婚女性の就業率の上昇は、専任職ではなくほぼ全てがパートタイマーの増加によるものであった。ウィルメットも例外でなく、結婚後パートの仕事をしたようだが、専任職につけるほどのキャリアがあるわけでもなく、働くことをやめてしまっている。³ このやり取りの直前、ウィルメットとシビルは女性の公務員を笑い物にする会話を展開する。

Sybil laughed. "Those splendid and formidable women! I often think that was one of the reasons why Noddy didn't want you to have a job — for fear you might turn into the kind of woman one sees getting out of the train at St James's Park or Westminster, carrying a briefcase with E.R. stamped on it.

"I suppose some of them try to combine marriage with a career — I mean the ones who carry baskets as well as briefcases and look both formidable and worried, as if they hoped to slip into the butcher's before going to their desks." (8)

夫のロドニーが官僚であるため公務員が身近ということもあるのだろうが、ここで女性公務員が揶揄の対象となっているのにはもう一つ理由があると思われる。これを理解するためには、第一次大戦後からの女性の就業をめぐる歴史を概観する必要があるだろう。

第一次大戦中、前線へ送られた男性に代わり、かつて男性の領域と見做されていた領域で女性が労働力としての能力を証明してみせた。その結果、1918年に男性と全く平等とは言えないまでも、女性にも参政権が認められることとなった。ところが、戦後女性の就労率が向上したかといえば、そうではなかったことは前述のとおりである。吉野恵子は戦後の女性の雇用拡大について、労働組合が復員してきた男性の雇用を守るため1918年の会議で決議した内容を次のようにまとめている。

戦後は元の状態に戻すとの約束を取り付けていた組合は、既に戦争終了以前からそのための準備を始めていた。1918年3月の労働組合の会議で、女性の職業労働はその家族の生活の利益を第一にすること、そのためある種の職業の就業を禁止すること、既婚女性の雇用を禁止すべきこと、労働保護法を強化すべきこと、との勧告が決定された。(4)

1919年には性差別除去法(Sex Discrimination Act)が制定され、女性の労働市場への門戸解放が期待されたが、結局この法律は有名無実となる結果となった。こうした中、ピムのヒロインの多くが該当する独身女性については、1931年には93.4%が就業していたが、ウィルメットのような既婚女性については雇用反対論が強硬に主張された。家計を維持するために女性の経済的貢献が不可欠であるという場合を除いて、女性の雇用への批判が高まっていき、それは大戦間に顕著になったマリッジ・バー(Marriage Bar)という形で実効力を持つに至った。⁴

イギリスにおいては、19世紀に起源を持つと言われるマリッジ・バーであるが、一般に実施されたのは両大戦間だったと見做されている。BBC やロイド銀行もこの制度を採用していたが、特筆すべき

は、この制度のもと教員や公務員の女性は結婚すると退職を強要され、働き続けることができなかったことだ。教職については 1944 年、公務員については 1946 年にマリッジ・バーの制度は撤廃されたが、女性の居場所は家庭だというイデオロギーへの回帰は、当の女性たちの中に深く浸透していた。ウィルメットとシビルの女性公務員への偏見に満ちた発言は、このような歴史的背景からくる「女性公務員＝経済的に困窮している」という固定イメージに裏打ちされていると言えよう。

しかしながら、ウィルメットの言葉を注意深く読んでみると、彼女のアンビヴァレントな心情が垣間見える。彼女は「経済的に必要でない限り、妻は外で働くべきでない」という夫ロドニーの主張を外で働かないことの口実として持ち出しているが、それについては明確に「時代遅れ」(old-fashioned)と価値判断を下している。また、自分がどこかの Office で働いているところを想像し、次のように語っている。

I sometimes liked to imagine myself in a small cosy office where a little group of women might gather in a room, drinking tea and eating biscuits, discussing the iniquities of the Boss. I could picture the boss himself coming bursting into the room, perhaps with an ill-typed letter in his hand, and the cool stares of the women as they stood with their teacups in their hands, letting him have his say, putting him out of countenance with their insolent detachment, so that his wrath smouldered out like a damp squib and he was left floundering and stammering. (23-24)

この空想は、以前ロドニーから聞いた女性の部下の話が伏線となっている。その時ロドニーは女性タイピストのヒステリックな反応を愚痴っていた。(ちなみに、そのヒステリックな女性タイピストは作者と同じピムという名前だ。)ウィルメットの空想の中では、タイピストに激昂した男性上司が連帯した女性たちによって冷たくあしらわれ、矛を収めることになっている。ウィルメットは一方では「既婚女性は外で働くべきではない」という古い価値観に従いながらも、もう一方では自分も職業婦人として男性社会と対峙したいという気持ちも持ち合わせているのかもしれない。

III

自らを“useless”と認めてしまうことは、ほとんどの人間にとって耐え難いものだ。特に、立派な家に住み、堅実な職業に就く夫を持ち、“I thought we(Rowena and Wilmet) must have made quite a pleasing picture — two tall tweedy young Englishwomen embracing on a Surrey roadside.” (32)などと、ナルシスト的な側面を持つウィルメットにとってはなおさら難しいことである。しかしながら、前章で述べたように、家の中でも外でも、ウィルメットは自らを“useless”と感じている。では、彼女がその後ろめたさを中和し、自分の存在意義を確認する方法は何だろうか。

ロウィーナの家でピアーズに遭遇し、彼から優しい言葉をかけられたウィルメットは、有頂天になって、自分の前途に開かれた可能性について次のように述べる。

I smiled. The evening had been almost too successful, and I had the pleased and comfortable feeling I used to have after parties in Italy when I had been admired and cherished. But now, of course, it was rather different...and as for Piers, drifting and rootless, perhaps often drunk, it might be that my friendship could be beneficial to him. It seemed an excellent winter programme.....There seemed at that moment no limit to what I could do. (48)

ここでウィルメットは、これから始まろうとしている（とウィルメットが予感している）自分とのロマンスがピアーズの人生を救うことになるかもしれないと期待している。そして、さらにその希望的展望は彼女にこれまでにない全能感を与えている。彼女は控えめに“my friendship”と言っているが、初めからウィルメットが異性としてピアーズを意識しているのは明らかであり、彼とのロマンスによって“useless”な自分が“useful”な存在へと変わることを夢想している。彼を救うことがウィルメットの存在意義となり、同時にウィルメット自身をも救うことになるのだ。ここでイタリア時代のことが言及されるのは決して偶然ではない。毎日を無為に生きている、子どもなし、仕事なしの33歳既婚女性ウィルメットにとって、自分の人生が最も輝いていたのは、過ぎ去りし過去である。そして、その過去において自身の存在証明となるものは、かつて男性たちから受けた褒め言葉であり、ちやほやされた経験の記憶である。ウィルメットが時折回想するイタリア時代の異性とのエピソードは、彼女の回帰願望の表れと言ってよい。⁵ 現在でも、男性から魅力的な異性として見られることほど、彼女を舞い上がらせることはない。たとえ相手がロウィーナの夫であっても暗闇で手を握られれば、“I felt flattered and a little guilty.”(38)と感じ、“smiling to myself”(39)と悦に入ってしまう。つまり、ウィルメットには、現在も男性による異性としての自分の評価が“useless”という罪悪感から逃れる術なのである。

しかし、時を経た今の現実では、イタリア時代に秘密の恋愛体験を共有していたロウィーナとも共有すべきものはない。ウィルメットは“The days when we had confided our emotional secrets to each other were gone now, or perhaps it was the secrets themselves rather than the days which were gone, I thought rather sadly.”(34)と過去が戻らないことを悲しんでいる。それに対し、3人の子どもの母親であるロウィーナは自由な時間は欲しているが、若かりし日々への執着は次のようにウィルメットとはかなり異なっている。

“....Neither of us (Wilmet and Rowena) had had a lover, or is ever likely to. The idea has got translated into something remote, even comfortable, now. Like morning coffee with a woman friend in a country town — none of the uncertain rapture and agony of those Rocky Napier days!” (159)

ロッキー・ネイピアとはイタリア時代にロウィーナとウィルメットが熱を上げていた男前の士官であり、『すばらしい女たち』でもヒロインの隣人として登場している。このロウィーナの言葉にウィルメットは内心で“I suddenly felt that I wanted to break out of the mould of respectability into which Rowena had cast me and say ‘Speak for yourself!’”(156)と反発する。ロウィーナのような現実に裏打ちされた人生観が希薄で、充実した今を生きていないウィルメットには、異性にちやほやされた過去を今に反復することこそが存在証明なのである。

ピアーズの勤め先の出版社には、ギリシア語の校正をしているミス・リンプセット(Miss Limpsett)がいる。彼女は学者の父親の手伝いをしているうちに、古典語の知識が身につきそれを活かして自活している。彼女のカバンの中に女性雑誌が入っているのを見た時、ウィルメットは“I saw that she also had a popular women’s magazine in her basket, and was glad to think of her escaping into a world of romance after her dreary day at the press.” (77)と述べる。中年で独身、身なりも構わないミス・リンプセットはウィルメットと対照的であり、ウィルメットから見れば、気の毒な女性に見える。しかしながら、ミス・リンプセットは少なくとも自分の能力で自立しており、楽しいものでなくても現実を生

きている。現実には自分の居場所を見出せず、ピアーズとの恋愛というロマンスの世界に逃げ込もうとしているのは、むしろウィルメットの方だ。

ここで、ロドニーにもらった誕生日プレゼントについて、ウィルメットが語った言葉を思い出そう。ロウィーナが夫にもらうフランス製香水と比べ、“nothing really spontaneous or romantic about it”だと不満げだった。また、シビルが古本屋でオペラ歌手の自伝を見て、“What tremendous loves these women seem to have had in their lives....It makes one’s own seem so dull”と言うと、“Yes, but I suppose we should all be able to make our lives sound romantic if we took the trouble to write about them”(22)と返答する。さらには、ロウィーナの郊外の家で、ピアーズと二人きりで話をした時には、“The atmosphere was almost romantic — indeed, a connoisseur of unusual atmospheres would have said that it was.”(47)と、自分のおかれた状況をロマンティックだと判断する。彼女は未だ行ったことがない “places that seemed impossibly remote and even romantically inviting”(18)へとトロリーバスが連れて行ってくれと感じている。このように、ウィルメットが事あるごとに“romantic”という単語を多用することから、彼女が無味乾燥な日常に求めているのが“romantic”な要素だということは容易に見て取れる。

E.サガリス(E.Tsagaris)が“Wilmet identifies herself with romance heroines”(98)と指摘しているように、ウィルメットは自らの無為な生活に意味を持たせようと、ロマンスのヒロインに自分を何度も重ねようとする。クリスマスに美しい装飾が施されたハート型の小箱が匿名で送られてきた時、彼女は蓋に書かれた“If you will not when you may/ When you will you shall have nay.”という銘を読みながら、ピアーズからの贈り物と思い込み、次のように自分を小説のヒロインに喩えている。

I felt like the heroine of a Victorian novel, for I had thrust the little box into the pocket of my dress so as to hide it, my fingers were nervously feeling it, tracing out the inscription on the lid. Who but Piers could have thought of such a thing, and what did he mean by it? I kept asking myself. (101)

この贈り物以来、ピアーズとのロマンスの妄想はウィルメットの中でどんどん膨らんでいく。後にロウィーナの証言により、この贈り物は彼女の夫ハリーからだったことが判明するが、それでもウィルメットの妄想はもはや止まらない。二度目の彼とのランチの際、彼が上機嫌で仕事に対して前向きになっているのを見て、自分の愛と理解がピアーズを救ったのだと思い込む。初めて他者から必要とされる“useful”な存在になったとウィルメットは充足感に酔いしれるのだ。

I gave myself up to a happy dream in which I went to look after Piers when he was ill or depressed or just had a hangover....I felt that Piers really needed me as few people did. Certainly not Rodney, I told myself, justifying my foolish indulgence. Piers needed love and understanding, perhaps already he was happier because of knowing me. When I had reached this conclusion I felt contented and peaceful, and I leaned back in my seat, smiling to myself. (174-75)

ウィルメットという彼女の名前自体が 19 世紀イギリスの作家 Charlotte Yonge(1823-1901)による *The Pillars of the House*(1873)の登場人物に因んでいるということは非常に示唆的だ。彼女の名前の由

来が語られる場面前後を詳細に見てみよう。それは、ピアーズとの最初の昼食後のことだ。食事の後の散歩の途中“a great and splendid looking building”(74)が立ち現れるが、その豪華な外観とは裏腹に、建物の正体は不要になった家具の保管庫である。それを知ったウィルメットは“it's all too noble to be just *that*”と叫び、“It's rather sad, really, isn't it?”(74)とピアーズに同意を求める。その返答としてピアーズは“*But Wilmet, life is like that, you know. Like your name — so sad, and you so gay and poised.*”(75)と、不要になった家具と豪勢な建物のギャップの悲しさの比喩としてウィルメットの名前を持ち出してくる。ウィルメットの名前がヤングの小説に因んでいると語られるのは、この時である。その直後、帰宅を仄めかすウィルメットとピアーズの会話は次のように続く。

... ‘Nobody will miss you.’

‘No,’ I said comfortably. ‘I’m useless.’

He did not contradict me. (75)

The Pillars of the House は両親を失った 13 人の子どもたちが長兄の奮闘で周囲の助けを借りながら成長するという物語だ。ウィルメットはその長女の名前で、弟妹の精神的支柱となる人物である。ヤングの物語を知っている読者なら、“useless”なヒロイン、ウィルメット・フォーサイスが元祖ウィルメットとかけ離れていることは容易にわかるだろう。ところが、当のウィルメット自身はこの皮肉にまるで気がつかない。彼女はなんとなく意味ありげなピアーズの言葉にロマンティックな響きさえ感じ取り、“I liked this description of myself and longed for him to say more.”(75)とまで考えるのである。ここでは、ロマンスのヒロインと現実のウィルメットのギャップが強調され、それに気づかずヒロインを気取ろうとするウィルメットの哀れな滑稽さが浮き彫りになっている。

次章では、ウィルメットの現実誤認によって引き起こされる上記のようなドラマティック・アイロニーについて、いくつかの事例を挙げて検証したい。

IV

ウィルメットの最大の事実誤認はピアーズとの関係についてである。前章で見たように、彼女はピアーズが自分に異性として好意を抱いていると思い込み、自分の愛情と理解がピアーズを立ち直らせ、幸せにしたのだと夢想する。自分が必要とされているということが彼女に充足感を与えるのだ。

ここで、ウィルメットとピアーズの関係について別の角度から見てみたい。特筆すべきは義母シビルの反応である。このシビルという女性は物語の冒頭近くでウィルメットによって“a dumpy square-faced woman of sixty-nine, energetic and brusque in her manner. She had been in youth, and still was, passionately interested in archaeology” (7)と紹介される。衣装に極端に拘るウィルメットによれば、“her clothes always looked the same — of no particular style or even colour”(9)という“very unfeminine”(110)な変わり者である。不可知論者であるため教会には全く興味はないが、社会奉仕活動には非常に熱心であり、A.ウェルド(A.Weld)が“Wilmet's mother-in-law serves as a role model of charity and selflessness.”(113)と述べているように、一見無神経で不器用な人物に見えるが、実はウィルメットの誕生日のディナーに彼女の好物ばかりを用意する思いやりや繊細さを持ち合わせている。その知的好奇心ゆえ、ピアーズが教えているポルトガル語のクラスに参加を提案するのも彼女である。

ポルトガル語のクラスの後、ウィルメットはピアーズに念願のランチに誘われる。彼に下心があるウ

イルメットはシビルに言い訳がましく説明するが、彼らを身近で見ている彼女は“*That should be good for your Portuguese conversation,*”(69)と、関心がなさそうである。また、ピアーズにお茶に招待されたと知っても、シビルは“*you look very nice and I hope you will enjoy yourself.*”と快く送り出す。息子の妻がハンサムな未婚の男性と二人きりで会うと聞いても、シビルは反対しない。この時ウィルメットの中では、ピアーズへの恋心が頂点に達していたので、さすがの彼女も義母の態度を不審に思うが、“*If it had seemed odd, and it had a little, for Sybil to send me off to Piers with her blessing, I was now reminded that to her he was after all our Portuguese teacher and the brother of my best friend.*”(203)と都合の良い理屈で納得しようとしている。しかし、実はこの義母の反応にはこれ以上の理由があったのだ。C. バークハート(C. Burkhart)はシビルが物語の初めから繰り返し、ホモセクシャルについて仄めかしていると言う。そして、“*Sybil’s insistence prepares us for the gradual revelation that Piers Longridge himself, in whom Wilmet conceives a romantic interest...is gay.*”と指摘する。(101)

実は、前章で示したウィルメットの充足感あふれる場面の前には、あるエピソードが差し挟まれている。仕事に出ていないピアーズを心配して、ウィルメットは彼のフラットに電話をかける。電話に出た“*a flat quiet voice, slightly common*”にウィルメットは狼狽えて、伝言を残して受話器をおく。かねてからピアーズがフラットを共有している同僚（と勝手にウィルメットが思い込んでいる）が誰なのか関心を寄せていたウィルメットだが、その時彼女は電話に出た相手について、次のように考える。

I wished now that I had asked the name of the person who had answered me....Piers’s colleague, with whom he shared the flat? That seemed unlikely. The voice did not sound right, though I could not have said exactly why. Then it occurred to me that the flat was not self-contained and that the telephone was a communal one which rang in the hall downstairs. In that case anyone might have answered it, some other person living in the house or the landlady’s son. (168)

これまで、ただ“voice”でしかなかった声は、この最後の部分で初めて男性だったことが判明する。おそらくピアーズはホモセクシャルであり、ウィルメットの思い描く彼とのロマンスは彼女の独り相撲に終わると、ここまでの経緯を読んできた読者には容易に予想できる。つまり、ウィルメットと読者との認識のずれはドラマティック・アイロニーを生み出すことになり、彼女の自己陶醉が強まれば強まるほど、物語の喜劇性が高まっていくのである。

今や、読者も含めて彼女以外の誰もがピアーズが求めているのがウィルメットでないことに気づいている。それにもかかわらず、ウィルメットは彼との関係の進展に胸膨らませ、いつもより念入りに身支度を整え、彼との逢瀬（とウィルメットは確信している）に出かけていくのである。その時の気持ちをウィルメットはこう語る。

May has always seemed to me, as indeed it has to poets, the most romantic of all the months....I was glad when I reached our meeting place and saw Piers standing with his back to me, apparently absorbed in a border of lupins. I wanted to rush up to him with some silly extravagant gesture, like covering his eyes with my hands; and my hands were outstretched, waiting to be taken in his, when I called his name and he turned round to face me. (203)

既に読者にはウィルメットのロマンス幻想がまもなく崩れ落ちることが解っている。その結末が見えていながら、このような有頂天になったウィルメット自身の語りを読むとき、彼女の哀しくも滑稽な事実誤認を突きつけられる。案の定、ピアーズはウィルメットのロマンティックな気持ちになど全く頓着しないで、“Wilmet, what’s the matter with you? You’re talking like one of the cheaper women’s magazines.”(204) とコメントする。これまで見てきたように、現実には自らの居場所を見出せないウィルメットは、ピアーズとのロマンティックな関係にすぎるように自身の存在意義を求めてきた。しかし、それは女性誌に掲載されている安っぽいロマンス小説のように現実ではない。このようなウィルメットの愚かしい誤読を最も的確な言葉で指摘するのが、妄想ロマンスの当の相手、ピアーズであった。好ましくない現実を突きつけられることによって、ウィルメットの幻想がまさにこの時点から加速度的に崩れていくのは読者にとって既定路線である。

この後、ピアーズのフラットを尋ねることになる。と同時に、彼と部屋を共有する「同僚」（勝手にウィルメットが思い込んでいた）に紹介されることにもなる。ピアーズと一緒に暮らしているのは、“about twenty-five years old, with a neat-featured rather appealing face and sombre brown eyes”(207)のキース（Keith）という男性だった。見窄らしい区画の彼らのフラットを訪ねると、さまざまな点で自堕落なピアーズの生活ぶりをキースが整えているのが明らかになる。ピアーズの散らかり放題の部屋は片付けられ、ささやかだが心のこもったお茶が用意されている。その後、キースがモデルの仕事もしていると聞かされると、ウィルメットは思わず“the note of horror”を露わにしてしまう。それに対するピアーズの反応が、ウィルメットをロマンスの甘い幻想から覚醒させる決定的なものとなる。彼はウィルメットの生きている世の狭さを指摘する。

‘Well, hasn’t it ever occurred to you that somebody must pose for those photographs of handsome young men you see in knitting patterns and women’s magazines?’

‘Yes, but not people one actually *knows*.’

‘Not people *you* know, you mean, but there *are* others in the world — in fact quite a few million people outside the narrow select little circle that makes up Wilmet’s world.’

I had a dreadful feeling that I might be going to cry.... (214)

彼女はピアーズの言葉に衝撃を受けながらも、帰路次のように考え、自省する。

I felt battered and somehow rather foolish, very different from the carefree girl who had set out across the park to meet Piers. But I was not a girl. I was a married woman, and if I felt wretched it was no more than I deserved for having let my thoughts stray to another man. And the ironical thing was that it was Keith, that rather absurd little figure, who had brought about the change I thought I had noticed in Piers and which I had attributed to my own charms and loving care! (215)

ここで初めて、ウィルメットはピアーズとの関係について読者と認識を共有するに至る。

その後、ウィルメットの現実誤認が爽快なほどに次々と露見していく。まず、義母のシビルが考古学のルート教授（Professor Root）との結婚を宣言したことがウィルメットを仰天させる。自宅に大きなバラの花束が送られてきた時、てっきり自分の“some unknown or forgotten admirer”からのものだと

ワクワクしたウィルメットだったが、シビル宛のものだとわかると“Why should anyone send flowers to Sybil? I wondered. It wasn't her birthday and she was hardly the kind of person who invited these spontaneous tributes of admiration.” (166)などと決めつけていた。その日夫がサプライズの贈り物を持たず帰宅したときのウィルメットの不機嫌には、このシビルへの贈り物が影響しているのは言うまでもない。

メアリ・ビーミッシュ(Mary Beamish)とマリウス・ランサム助司祭(Father Marius Ransome)の結婚を知ったときは、さらに自分の観察眼が鋭穴だったことに気づく。メアリはウィルメットと同年代だが、いつも最新流行の服を好きなだけ買う彼女と比べて“dowdily dressed”である。そのため、ウィルメットは“she had neither the wish nor the ability to make the most of herself” (17)と評価し、常に女性として優越感を感じてきた。しかし、同時に“I was unable to decide what it was that I found so irritating about her goodness; it could not be only that she was such a contrast to myself and made me feel guilty and useless.”(88)とメアリに劣等感のようなものも感じている。人間として完全には優位に立てないメアリであるが故に、マリウス本人に「いい人」(a fine person)と評されるのを聞いて、メアリが彼の恋愛対象にはなり得ないとウィルメットが溜飲を下げていた部分もある。既婚者であるにもかかわらず自分の方が遥かに彼の魅力を受け止めるに足ると考えて、次のようにも述べている。

...it occurred to me that he probably would not use his charm on Mary, whom he regarded as a fine person — that, presumably, was reserved for people like me who were less fine, the kind of women who would expect it. (109)

また、メアリが望みのないマリウスへの恋に一方的な希望を抱いていると決めつけ、“It seemed such a hopeless and hackneyed situation — dowdy parish worker in love with handsome celibate priest — and I hope she would not brood too much over it.”(230)と述べる。これまで、彼女のピアーズについての“hopeless and hackneyed “な幻想に距離をとってつき合ってきた読者は、自らの愚かさを棚上げして、メアリについて語るこのウィルメットのコメントにアイロニカルな喜劇性を感じずにはいられない。

自分の知らないところで人々はそれぞれの人生を生きているのだと知って、ウィルメットは改めてピアーズに指摘された自分の認識力について内省する。

It seemed as if life had been going on around me without my knowing it, in the disconcerting way that it sometimes does, like the traffic swirling past when one is standing on an island in the middle of the road. Sybil and Professor Root, Piers and Keith, Marius and Mary — the names did sound *odd* together — all doing things without, as it were, consulting me. (248)

当然のことだが、ウィルメットに限らず、人は自分の視点からしか現実を見ることができない。そして、そこから見える現実はずその人物の主観に色付けされている。この『祝福のグラス』の面白さは、一人称の語り手ウィルメットの現実認識と彼女の語りの細部から読み取ることのできる現実との間のギャップにある。

ピムの小説で物語を一人称の視点で語るもう一人のヒロインに、代表作『すばらしい女たち』のミルドレッド・ラスベリー(Mildred Lathbury)がいる。ただ、ミルドレッドとウィルメットはその現実認識能力において、決定的に異なっている。それは、ミルドレッドの視点を通して描写される出来事がおお

よそ間違っていないのに対し（もちろん、彼女は彼女で主観的判断から完全に免れているわけではないが）、ウィルメットの判断は大いに彼女の現実認識の甘さや希望的観測に基づいているため、その語りはそのまま受け取れないということだ。そして、重要なことは、彼女の視点の曇りは物語の序盤で早々に読者に見ぬかれてしまい、あてにならない語り手として読者に認知されてしまうことである。

その結果、読者は語り手ウィルメットの言葉を鵜呑みにせず、一種の憐れみを感じながら彼女の誤認に満ちた物語を楽しむことができるのである。この物語を読みながら、読者は彼女の語りを細部まで吟味し、そこから取りこぼされた現実を再構成するプロセスを辿ることになる。J.ロッセン(J. Rossen)はウィルメットの誤読に満ちた語りについて、次のように指摘する。

The novel reads something like a mystery story, and like all good detective fiction, it is filled with clues to the reader. We learn through allusion, and finally through direct confirmation, that Professor Root will marry Sybil Forsyth, and that Mary Beamish will marry Marius Ransome, that Keith is Piers's lover....(147)

私たち読者がウィルメットの語りにドラマティック・アイロニーを探り、彼女の愚かさにコミカルな要素を楽しむことができるのは、語り手ウィルメット・フォーサイスを聡明な“an excellent woman”ではなく、D.ベネット (D. Benet) の言うように“snobbish, spoiled, and sometimes foolish” (6)な女性に設定したことによる。サガリスは“Not many critics like Wilmet, and some see her self-centered.”と述べているが、実は読者にとってこの物語のヒロインはそれほど非難の対象とはなっていない。ウィルメットの誤認に満ち満ちた一人称の語りが生み出すアイロニーによって、読者は彼女に対して常に優越感を抱くため、彼女に反感や嫌悪を感じることはない。極めて自己中心的ではありながらも、その一人称の語りの根底には彼女の弱さや劣等感があることが読み取れる。それゆえ、どんなに愚かしい妄想に囚われようとも、ウィルメットは終始憎めない語り手として読者の共感と理解を勝ち得るヒロインであり続けることが可能なのだ。

V

ウェルドはこの作品を“a Bildungsroman of the moral consciousness, the story of a woman's psychological journey from I to We, in terms of her marriage, her friendships, her church, and her community.”(106)と捉えている。ただ、ウィルメットが物語の中で本当に精神的成長を果たしたかどうかについては、大いに疑問である。もちろん、前述したように、彼女がその見識の狭さを痛感し、自身が描いていた世界が現実と異なることに気づくプロセスが描かれてはいる。シビルの家を出ることになって初めて、夫ロドニーと正面から向き合うことになり、独立した大人としての生活を始めることになるのも事実だ。しかし、これでウィルメットがこれまでの妄想傾向から縁を切り、賢明な女性へと変貌していくかというと、それほど単純ではない。

物語の終わり近くで、ウィルメットは一番身近な夫から衝撃的な告白を受ける。ロドニーが同僚の友人である魅力的な女性に浮気心を抱いて、何度か食事に誘っていたというのだ。自分がピアーズとのロマンスにのぼせあがっていたことを棚にあげ、最早恋心とは無縁の人間だと高を括ってきたロドニーが、他の女性に関心を持ったという事実ウィルメットは動揺する。しかし、ロドニーのアバンチュールについては、敏感な読者なら既に予測していたことだ。お相手のプルーデンス・ベイツの話題やロドニー

の挙動不審な態度を、ピムは伏線として巧妙に物語に忍ばせているからだ。ロドニーの浮気心を知ってウィルメットはこう感じる。

I had always regarded Rodney as the kind of man who would never look at another woman. The fact that he could — and had indeed done so — ought teach me something about myself, even if I was not yet quite sure what it was. (270)

この先ウィルメットはこのような自分の認識と現実のギャップを何度も経験し、その度に自己と現実との関係を修正していくことになるだろう。しかし、完璧に正しい現実認識に辿り着くことは永遠にない。そもそも正しい現実認識というものがあるのかさえ疑わしい。

最終章で言及されるように、この小説のタイトル *A Glass of Blessings* はジョージ・ハーバート (George Herbert, 1593-1633) の詩「滑車」(“The Pulley”, 1633) の一節に由来する。人間を創造した時、神は「祝福のグラス」(a glass of blessings) を手にして、可能な限りの贈り物(blessings)を人間に与えたが、神の恩恵を忘れてしまわないよう、「休息」(rest)だけは与えなかったという内容の詩である。「休息」を与えられなかったわれわれ人間は、一時の現実認識に安住せず、不断にそれを更新していく運命にあるのかもしれない。この作品のタイトルはそう暗示しているように思われてならない。ところが、最終章においても、ウィルメットは“a glass of blessings”を「一杯の祝福」と解釈し、後半部分の与えられなかった「休息」の意味を考えるには至らない。“there is no reason why my own life should not be a glass of blessings too. Perhaps it always had been without my realizing it”(277)と物語を締めくくるウィルメットの満足げな語りはここでもアイロニカルに響く。やはり、彼女は誤読から永遠に解放されないのである。

この小説において、われわれ読者はウィルメットに常に優位に立ちながらも、その迷走ぶりに自分自身の経験を重ね合わせ、愚かしくも愛すべき人間喜劇を堪能する。ピムが何度もイギリスの偉大な小説家オースティンに喩えられるのは、まさにその点においてである。そして、ピムがこの作品で普遍的な人間模様をよりアイロニカルに描き出し、その喜劇性を高めることができたのは、愚かしくも愛すべきウィルメットという語り手を創造したことによるのである。

Notes

1. ピムの作家としての数奇な経歴については、R. E Long による *Barbara Pym*, pp1-24 を参考にした。
2. 初対面の男性について、ウィルメットはその人物がハンサムであるとコメントすることが多い。マリウスや教会の式司者コールマン、果てはシビルと結婚することになるルート教授の容貌までハンサムと評している。また、自分の装いについて出かける度に詳細に語っていることが、ウィルメットの語りの特徴として挙げられる。外見についての執着が彼女の浅薄な認識力に関係しているかもしれない。
3. アンドリュー・ローゼン、『現代イギリス社会史—1950-2000』川北 稔訳 (岩波書店、2005 年)、137-142.
4. 吉田恵子「イギリス両大戦間の女性労働 一雇用労働からの後退と失業保険一」『情報コミュニケーション学研究』第3号 (2007)、4 頁。
5. ウィルメットの過去への回帰願望は他の場面でも示されている。ベイソン(Bason)に招かれて司祭館のテーマズ司祭(Father Thames)の部屋で、女性たちに囲まれる司祭の若い頃の写真を見た時、夫

ロドニーが“Now we must get Wilmet away from brooding over these old photographs...She gets very melancholy over things like that.”(116)と言っていることから、ウィルメットがいつも過去を懐かしむ傾向にあることがわかる。

Works Cited

- Benet, Diana. *Something to Love: Barbara Pym's Novels*. Columbia, MO: University of Missouri Press, 1986.
- Burkhart, Charles. *The Pleasure of Miss Pym*. Austin: Texas University Press, 1987.
- “Glamorous Acolytes: Homosexuality in Pym's World” in *Independent Women: The Function of Gender in the Novels of Barbara Pym*, 95-105
- Cotsell, Michael. *Modern Novelists: Barbara Pym*. Houndmills: Macmillan, 1989.
- Long, Robert Emmet. *Barbara Pym*. New York: Ungar, 1986.
- Pym, Barbara. *A Glass of Blessings*. London: Virago, 2022.
- Rossen, Janice. *The World of Barbara Pym*. New York: St. Martin's Press, 1987
- , ed. *Independent Women: The Function of Gender in the Novels of Barbara Pym*. New York: St. Martin's Press, 1988.
- Tsagaris, Ellen M. *The Subversion of Romance in the Novels of Barbara Pym*. Bowling Green, OH: Bowling Green State University Popular Press, 1998.
- Weld, Annette. *Barbara Pym and the Novel of Manners*. New York: St. Martin's Press, 1992.

ローゼン、アンドリュー 『現代イギリス社会史—1950-2000』川北 稔訳 岩波書店、2005 年
吉田恵子「イギリス両大戦間の女性労働 一雇用労働からの後退と失業保険一」『情報コミュニケーション学研究』第 3 号（2007）1-14.